

2022 年 6 月 12 日（日）「奴隷の子、約束の子」

ガラテヤ 4:21-31（その 2）

21 律法の下にいたいと願う人たち、私に教えてください。あなたがたは律法に耳を傾けないのですか。

22 アブラハムには二人の息子がおり、一人は女奴隷から、もう一人は自由な身の女から生まれた、と書いてあります。23 女奴隷の子が肉によって生まれたのに対し、自由な身の女から生まれた子は約束を通して生まれたのです。

24 これには別の意味があります。二人の女は二つの契約を表しています。一人はシナイ山から出て、奴隷となる子を産みます。これがハガルです。25 このハガルは、アラビアではシナイ山のことで、ちょうど今のエルサレムに当たります。エルサレムは、その子どもたちと共に奴隷となっているからです。26 他方、天のエルサレムは自由な身の女であり、私たちの母です。27 すなわち、こう書いてあります。

「喜べ、子を産まない不妊の女よ。歓声を上げて叫べ、産みの苦しみを知らない女よ。

夫に捨てられた女の子どもは、夫のある女の子どもより多いからだ。」

28 きょうだいたち、あなたがたはイサクと同じように約束の子どもです。29 しかし、当時、肉によって生まれた者が霊によって生まれた者を迫害したように、今も状況は同じです。30 しかし、聖書は何と言っているでしょう。「女奴隷とその子を追い出せ。女奴隷の子は、断じて自由な身の女の子と一緒には相続をしてはならない」とあります。

31 それゆえ、きょうだいたち、私たちは女奴隷の子どもではなく、自由な身の女の子どもなのです。

【序論】

ガラテヤ 4:21-31 を二回に分けて学んでおりますが、前回は主にイシュマエルとイサクの出生に付随した問題について語らせていただきました。今日はこの出来事をパウロがどう解釈しているかに焦点を当ててまいります。彼が言っていることの本旨を読み取るのに苦労しましたが、実際、普通に創世記を読んでいたのではまず思いつかない発想です。私自身、このテキストに取り組み始めた段階では煙に巻かれたような状態になりましたが、学んでいくうちに「なるほど、そういう読み方ができるのか」と視界が開かれていきました。彼の複雑な思考をできる限りシンプルにお伝えしたいと思っております。

【本論】

本論 1. 女奴隷の子（イシュマエル）／自由な身の女から生まれた子（イサク）

アブラハムには二人の息子がおり、一人は女奴隷から、もう一人は自由な身の女から生まれた、と書いてあります。女奴隷の子が肉によって生まれたのに対し、自由な身の女から生まれた子は約束を通して生まれたのです。（4:22-23）

前回お話ししましたように、「女奴隷の子」とはエジプト人ハガルの息子イシュマエルを指し、「自由な身の女から生まれた子」とはアブラハムの正妻サラの息子イサクを表します。イシュマエルはイサクより 13 年も先に生まれ、時系列的には長男でありましたが、「奴隷の子」という生まれつきの身分ゆえに、相続に際して、後から生まれたイサクに勝つことはできませんでした。人間的には何とも哀しい話ではありますが、法的現実には厳しいものがあつた。アブラハムに与えられた神の祝福を受け継いだのはイサクであり、財産の大半が彼のものになったと思われます。パウロはイシュマエルの逃れがたい身分を「奴隷状態」と呼んでいる。彼は自分の力でその身分を変えることはできません。パウロは、このイシュマエルの身分と「律法の奴隷」状態にあるユダヤ人とを結びつけて説明していくのです。

本論 2. パウロ的解釈（ハガルーシナイ山ーエルサレム／サラー天のエルサレム）

これには別の意味があります。二人の女は二つの契約を表しています。一人はシナイ山から出て、奴隷となる子を産みます。これがハガルです。このハガルは、アラビアではシナイ山のことで、ちょうど今のエルサレムに当たります。エルサレムは、その子どもたちと共に奴隷となっているからです。他方、天のエルサレムは自由な身の女であり、私たちの母です。（4:24-26）

ここではハガルとサラの身分が象徴している事柄について語られています。「別の意味」（ἀλλήγορέω／アレーゴレオー）という言葉は「比喩」と訳してもよい。比喩として「二人の女（ハガルとサラ）」は「二つの契約（業の契約と恵みの契約）」に例えることができる、パウロは言うのです。

まずハガルについて「シナイ山から出て」と言われていますが、パウロの念頭には、イシュマエルの子孫が北アラビアの砂漠に定住したという記事があるようなのです。

イシュマエルの子孫が住んだのは、ハビラからエジプトに近いシュルまでの、アシュルに向かう地域であつた。イシュマエルはすべての兄弟と対立して暮らした。（創世 25:18）

地図をご覧くださいと分かりますように、シナイ山というのはアラビアの南部に位置しており、そこはイシュマエル族の領分であったとすることができます。パウロはここに目を付け、イシュマエル族を律法が与えられたシナイ山と関連づけたのです。これは言ってみれば「こじつけ」なのですが、「奴隷の子」としてのイシュマエルと「律

2. エジプトとシナイ

2 エジプトとシナイ (前1400~1200年)



法の奴隷」という状態を結びつけて説明しようとしていることが分かる。では、「このハガルは、アラビアではシナイ山のことで、ちょうど今のエルサレムに当たります」とはどういう意味か。ここではおそらく、パウロ時代のユダヤ教の総本山であるエルサレムこそが「律法の奴隷」を生み出し続けている本拠地であるということが言われているのでしょう。「エルサレムは、その子どもたちと共に奴隷となっている」とある通り、律法を遵守して生きるよう子々孫々にまで教え続けているユダヤ人とは、ハガルの子孫、イシュマエルの子孫だと言うのです。ユダヤ人とは「奴隷の子」だと。

では、「他方、天のエルサレムは自由な身の女であり、私たちの母です」とは何を意味するか。「エルサレム」に「天の」ということばが付いていることから、神の約束が天より与えられ、サラは恵みによって身ごもったということが言われているようです。つまり、サラの子孫とは神の（救いの）約束を信じている者たちであり、それはキリスト者を指します。キリスト者は律法を守ることで救いを得ようとする生き方から解放され、ただ神の約束に依り頼み、神との自由な関係を得ている存在なのだと。

本論 3. 約束の子であるキリスト者

ここまでのパウロの論理がご理解いただけましたでしょうか。旧約聖書に精通していなくては、なかなかこういう読み方はできないと思います。パウロはもう一箇所、旧約預言書から引用しています。

すなわち、こう書いてあります。「喜べ、子を産まない不妊の女よ。歓声を上げて叫べ、産みの苦しみを知らない女よ。夫に捨てられた女の子どもは、夫のある女の子どもより多いからだ。」(4:27)

ここで引用されているのはイザヤ 54:1 であり、実際にはバビロン捕囚に遭った南ユダ王国の復興を予告する内容です。エルサレムは陥落し、神殿は破壊され、大多数の民が異国へ捕え移されてしまう。一時、エルサレムは荒廃し、その殺伐とした状況が「子を産まなかった女」「夫に捨てられた女」と比喩的に言い表されているのです。引用元を見ておきましょう。

喜び歌え、子を産まなかった不妊の女よ。歓声を上げて叫べ、産みの苦しみを知らない女よ。夫に捨てられた女の子どもは、夫のある女の子どもより多いからだ。(イザヤ 54:1)

パウロが熟慮してこの箇所を引用しているのかどうかは分かりません。本来、この聖句をサラの不妊と結びつけるのは、聖書解釈上おかしい話なのです。しかし、彼の思考の中ではこのような聖書箇所がどんどん結びついて行き、無理にでも自分が伝えたい事柄をまとめ上げてしまう。読者は着いて行くのが大変です。つまり、サラは 90 歳まで不妊の状態にあったけれど、神の約束が成就し、恵みによってイサクを生み、結果として多くの信仰の子孫の母になったということが言われているのです。ガラテヤの信徒たちは元々律法などとは無縁であり、神の約束に依り頼む以外に救いの道はないのだから、**「あなたがたはイサクと同じように約束の子どもです」(4:28)**という結論になる。更に、31 節では**「私たちは女奴隷の子どもではなく、自由な身の女の子どもなのです」**と、パウロはユダヤ人である自分もそこに加え、元々律法に生きていた者であっても、神の約束に鞍替えし、「奴隷の子」から「約束の子」に変えていただくことができると結んでいます。

【展開】

以上、パウロが言っていることを苦勞しながら読み解いてまいりました。ここでは「奴隷状態」という事柄が「律法」に特化されていますが、これはもちろん「罪の奴隷」という事柄にもピッタリ当てはまります。それだけではなく、「固定観念」「長年の心の捕

らわれ」「トラウマ」「負の連鎖」「悪循環パターン」など、ありとあらゆる縄目からキリストは解放することがおできになります。私たちの人生を縛り付けている諸々の事柄の解釈が根底から覆され、神の祝福の下に置き直される、それが福音の持つ力です。

※ 30 節の内容は、今日の箇所を更に複雑化してしまうので、脚注の中で説明させていただきます¹。

【結論】

ガラテヤ教会の信徒たちが陥った状態とは、まことの自由を得た者がわざわざ自分の体に縄を結びつけるようなものでした。彼らは、救いにおいて不要な割礼を自分自身に課し始めたのです。彼らがキリスト者でありながら再び縄目に縛られていったことは、私たちにも同じことが起きうることを警告しているでしょう。私たちも再び罪の奴隷となつてはいけません。そのようなことから私たちは解放され、神の子としての人生を歩み始めているからです。光なる主イエスを見つめ、光のうちに歩み続けたいと思います。

¹ 今日の箇所で一点引っかかる箇所があります。少なくとも私には読み流すことのできない内容でした。

しかし、聖書は何と言っているでしょう。「女奴隷とその子を追い出せ。女奴隷の子は、断じて自由な身の女の子と一緒に相続をしてはならない」とあります。(4:30)

ここでは、律法に依り頼む者は神の国を相続することができないと言われています。パウロの語調は鋭く、律法主義者を容赦なく救いの外に位置づけています。実際に起きた出来事として想起されるのは、ハガルとイシュマエルがサラに憎まれ、アブラハムの家を追われた場面です(創世 21:8-21)。こんなにひどいことがアブラハムの家の中で起きたということに、読者は悲しみさえ覚えます。普通に読めば、ハガルはアブラハム・サラ夫婦の願いによってアブラハムの側女となり、法的にサラの子となる息子を生んだのです。その子がアブラハムの相続人になると信じていたのに、結果として後から生まれたイサクによってその地位が奪われ、更に親子そろって追い出されるという憂き目に遭いました。彼らの人生の悲惨を思わずにはおられません。そして、パウロがこのような箇所を引用して、律法主義者は神の国から締め出されると言っているところにも、いささか配慮が欠けるのではないかと思うところがあります。

しかしながら、パウロの本来の意図とは、そのような差別にあるのではないでしょう。自分自身も元々律法主義者であり、神の国から断絶された存在であったが、恵みによって救われたという前例を挙げ、同胞ユダヤ人にも同じように救われる道があることを示しているのです。彼の思いは、ローマ 9-11 章を読めばよく理解できます。彼は同胞の救いのためであるならば、自分が代わりに呪われた者にもなるとまで宣言しています(ローマ 9:1-5)。

【祈り】

人を自由なる存在として造り給うた、天の父なる神様。その自由は、あなたとの正しい関係のあるところにこそ実現するものです。神から離れるとき、人は不自由になります。罪の奴隷となり、律法の裁きの下に自らを置くことになります。不自由を経験しない者はなく、誰もが罪から解放されることを求めて生きています。主イエスによる贖いが必要であり、ここに与えられる自由は、神との深い交わりに生きる幸いを得させます。この道を歩み続けることができるよう、お助けください。脇目もふらず、主イエスの背中を見て進んで行くことができますように。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、

人をご自身との関係のうちに、自由なる存在として創造し給うた、父なる神の愛、サタンの声に聞き従い、自ら不自由な道を選んだ者に、罪の赦しと、神との関係の回復を与え給う、主イエス・キリストの恵み、サラの子孫、信仰に生きる者の道を、終わりまで全うさせ給う、聖霊の親しき交わりが、あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。